

3. 地域再生（茶畑再生班、地場産業）

生徒：まず最初に、茶畑再生の発表を始めます。昨年の活動報告をします。最初に茶畑を借りる。これはお茶を管理することができないお年寄りから、荒れた茶畑を借りました。地権の問題で借りるのに苦労をしましたが、何とか借りることができました。再生については、まずお茶の周りの草を全部刈ることから始まりました。それからお茶を膝ぐらいの高さと背ぐらいの高さに刈り分けました。炎天下の中、とても大変でした。2カ月ぐらいでようやく終わりました。

次においしいお茶の入れ方について調べました。そしてその入れ方で実際に市販のものと再生したお茶畑のお茶を飲んでみました。再生したお茶畑のお茶は、まだまだおいしいお茶とは言えませんでした。

次に今年の活動計画を発表します。まず茶業試験場でお茶摘みをすることです。これは常に行っており、おいしいお茶を摘むことができ、できたお茶も飲みました。次に再生したお茶畑のお茶を摘んで飲んでみるということです。昨年の物と飲み比べて味が変わっているのか調べたいと思います。それと茶畑の管理です。来年、今年よりおいしいお茶ができるように維持管理したいと思います。

最後に「魔女の手揉み茶」として販売し、仁淀高校の名前を残したいと思っています。

生徒：私たち3人は地場産業について調べます。昨年の活動目的は「地域の方々と触れ合いながら、仁淀川町の良さを再発見する」でしたが、今年度は昨年の活動目的プラス料理研究をする予定です。取り組み内容はトマトやマッシュルームを栽培している農家へ取材に行き、取材した作物で商品開発に挑む。またその商品を町内で売り、町民の人に知ってもらうことです。

知事：仁淀川のお茶は、知る人ぞ知る素晴らしいお茶です。かつては、静岡のお茶と一緒に混ぜて売っていました。仁淀川のお茶の葉っぱがあるので、静岡茶として売ってるものがものすごくおいしくなったと言われていました。そのくらい、仁淀川のお茶はすごいんだそうです。昨年の「対話と実行」座談会で教えていただき、産業振興計画15ページ、16ページに地域アクションプランということで、仁淀川流域茶のブランド化を書いています。皆さんのやろうとしていることと一緒にです。昔はお茶をどんどん作り、静岡と一緒にどんどん売れていました。しかし、ペットボトルなどができて販売が厳しくり、全体のお茶の生産量が少なくなりました。元々ものすごくよい品質のものだから、それならば、さらに磨きかけてブレンドではなく、自分たちのブランドとして販売していこうという活動をこれから進めていこうとしています。他方で仁淀川町でお茶を作るというのは、地形がすごくきついので大変です。そういう所に若い人をどれだけ確保できるかという課題もあります。元々は全国に誇れるすごいものなので、その課題を克服し、ぜひ仁淀川茶を全国の人に知ってもらいたいと思います。

茶畑再生は大変だったと思いますが、お茶摘みなど茶畑で作業をしていて、素朴に思ったことはありますか。体がきついと思ったりしましたか。

生徒：やはり地形がきついで、上がったり下りたりしていたら足が疲れてきます。

知事：お年寄りでやっておられる方は偉いですね。逆に若い人が助けてあげないといけません、頑張ってやっていきましょう。

お茶を最初に飲んだ時は、どうでしたか。

生徒：他のお茶と飲み比べてみましたが、やはり何か硬いというか、そんな感じでした。

知事：私が茶業組合で飲ませていただいた時には、本当にすっきりしていて、これはおいしいなと思いました。大阪でスーパーやデパートの方に商品を見ていただき、その場で取り引き、契約を結んでいくという商談会をやりました。その時に仁淀川町の茶業組合の方が売り込みをしましたが、かなり好評だったようです。この地域にあるお茶は、大阪や全国でも通用するものだから、本当に地域の宝だと思います。皆さんも研究を進め、その先の発展に向けて頑張ってくださいと思います。

地場産品の料理研究では、どういうおいしい食べ物がありますか。トマト、マッシュルームの他にプラスアルファというのは何ですか。

生徒：プラスアルファというのは、仁淀川町でまだ誰も知らない、まだ発見されていない物を自分たちで探してみようということです。

知事：商品開発の構想はもう頭の中にできていますか。

生徒：企業秘密です。(会場笑い)

知事：皆さんが作った物を広くいろいろな人に知ってもらえるようになったらいいですね。マスコミの皆さん、ぜひよろしくお願ひ申し上げたいと思います。

大学生の方の話で、自分たちで企画して作ったお弁当を、コンビニエンスストアと協力して売っていくということをやりました。男性のチーム、女性のチーム、男女混合チームとか、いろいろなチームを組んで、それぞれがいろいろな地産地消弁当を作り、それをコンビニエンスストアで売ったそうです。そしたら、本当のプロが作った商品より売れたそうです。やはり心がこもっており、地元ならではの良さ、知らない所にこういうおいしいものがあることを知って、みんな驚きもあつたりするのかもしれない。ぜひ頑張ってくださいと思います。

まず、町内のお店に置いてもらい、できれば町内の皆さんを巻き込んで、新しい特産品づくりの場に繋がっていくといいですね。頑張ってください。

教育長：昨年のお茶と今年のお茶を飲み比べるというのはどのようにやるんですか。昨年のお茶を1年間おいておき、新茶と去年の茶を飲み比べたら新茶がおいしいに決まっていますよね。それをどうやって比べるのかと思って。

生徒：番茶で比べます。

知事：去年の味を覚えているんですね。

生徒：はい

教育長：自分の舌が物差しなんですね、分かりました。

商品開発は企業秘密ということで、楽しみにしています。秘密をオープンにする時にはぜひ私に連絡してください。

知事：このような取り組みは、産業振興計画の中でも一生懸命取り組もうとしていますが、独特の難しさを感じたことはありますか。こういうことが何とかなってれば、こういうことがなければもっとうまくいくのにとか、もっと早くできるのにとか、率直に。

生徒：人が少ないということです。

知事：一緒にやろうという人の数が少ないということですか。

生徒：お年寄りの方が多いので、傾斜の陰しい所だと栽培がしにくいかなと思います。

知事：余り量ができないということですね。たくさん作ろうと思っても作れる量が少ないということですね。

生徒：トマトは県外に出荷するぐらい価値があります。しかし、すごく高く、量が少ないため、町民の方にはなかなか手に入りません。もっと自分たちの手にも入ってくるような感じで、何かできたらと考えています。

知事：一般的に量が少ないと、高い価格で売れるものでないと所得にはなりません。希少価値が上り、量が少なくても高い価格で、全体としてたくさんお金が稼げるというふうにしていかないといけません。でも地元の人の方にも入れたいようならば、少し取っておくようにするのかな。

いいものがあっても量がたくさん取れない、これは高知県全体の課題だと思います。だから、産業として雇用拡大とか所得を生むことにはならないです。逆に、希少価値のある高付加価値のものにしていくことが大切ということは今議論しているところです。産業振興計画9ページにそういう話を少し書いています。「産業間の連携による高付加価値化の推進」こうすることで、いろいろな本県の強みを生かし、また弱みも克服して、県外にも出していけるようにしようと進めています。

皆さんの悩みは高知県全体の悩みだと思いますので、皆さんのアイデアで本当に素晴らしいものを出してもらいたいと思います。